

## 伊能測量漫筆 第6話 第二次測量になぜ伊豆半島が追加になったか

測量日記によると、第二次測量の最初の申請書には伊豆半島は入っていなかった。それが最終の申請書では唐突に伊豆半島が登場するのは、以前から腑に落ちなかったが、こんなこともある。第一次測量の地図を提出したのは、寛政12年12月21日（旧暦）だった。ところが、桑原隆朝から第二次測量の申請を奨められたのは12月20日だったと第2巻に書かれている。

そうであれば、第一次測量の地図は正式な提出以前に、しかるべき人物の内覧に供されていなくては、辻褄があわない。ひょっとしたら、こんなことではないかな、と考えてみた。

**桑原が突然訪問** 寛政12年（1800）の暮れに、第一次測量の地図仕立てに忙しい忠敬宅に仙台藩医・桑原隆朝があらわれる。お栄が取り次ぐ。

お栄「これはこれは桑原先生わざわざの御入来、恐縮でございます。取り散らしておりますが、どうぞお通りください」

桑原「忙しいところを失礼しますよ」

座敷に案内され、忠敬が出る。

桑原「忙しいところをお邪魔します。挨拶は抜きにしましょう。早速ですが、堀田撰津守様が地図の出来栄を気にしておられる。提出前に内見できないか、とのことだったので、飛んできたんだ」

忠敬「そうですか。それは有難いことです。一揃い仕上がったのですが、これを控えとし、さらに入念に上呈図を仕上げたいと思っているところです」

桑原「では、その控えをご覧に入れたら」

忠敬「結構です。桑原先生が持参していただけますか」「それならお預けしますが」

桑原「お預かりします」「お尋ねがあっても返事はできませんが、内見ならいいでしょう」

忠敬「お願いします」

**堀田撰津守の上屋敷で**

桑原「早速ですが、伊能宅へ行ってまいりました。てんやわんやでしたが、控え図が仕上がっていましたので預かって参りました。これと同じ図をさらに入念に仕上げ、提出すると申しておりました」

堀田「では早速広げて見よう」と家臣を呼ぶ。

小図一枚、大図二一枚（蝦夷地十一枚、本州十枚）を展開する。堀田撰津守は出来栄に驚嘆する。

堀田「こんな凄いことをやってくれたのか」「不測量と書いてあるのはどういう意味だろう」

桑原「地勢が険阻で近寄れず、測量できなかったので地図に入れなかった部分だそうです」

堀田「律儀なことだ」「仕上げは予想以上なので問題はない」「これからどうするかな」

撰津守、少し考え込む。

堀田「老中首座の松平信明様と相談しよう」「しばらく預からして欲しい」

桑原「いいでしょう」「どのみち、お上に提出する物ですから」

堀田は城中で老中首座の松平信明と地図を挟んで対面する。

信明「これが、伊能なる者の仕上げた地図か。今までの蝦夷図とは随分異なっている」

堀田「さようです。奥州街道筋と蝦夷地東南岸しかありませんが、距離は全て実測し、天文観測で緯度を測り、測量結果を修正したとのこと」

信明「詳しいことは分からぬが、これまでの蝦夷図とは大いに異なるな」「しかし、こちらの方が真実に近いような感じがする」

堀田「私も同感です」「これからどうしますか」

信明「この調子なら3年もかけたら、関東・東海一円の精密な図が出来上がりそうな気がするが」

堀田「そのとおりです」「しかし、今、ここで御用として測量を仰せ出すのも、少し早いような気がします」「蝦夷地の西半分は未測量です」「伊能の方から測量を願い出させ、その結果を見てということにしてはいかがでしょう」

信明「いいだろう」

堀田「そのように取計らいます」

堀田は早速、桑原を呼び出して、忠敬から第二次測量の申請を出させるよう内意を伝える。

桑原はすぐ忠敬宅に赴く。

桑原「蝦夷地の地図は老中首座の松平伊豆守様と堀田撰津守様に大変好評のようだ」

忠敬「それは有難いことです。骨折り甲斐がありました」

桑原「ところで、もう一度、蝦夷地を測ってみる気はないかな」

忠敬「えー。それはまた、どういう風の吹き回しで」

桑原「実はな、先日、仕上がった蝦夷図を内覧に入れたあと、堀田撰津守様から内意があつてな、伊能殿にやる気があるなら、もういっぺん、ということだった」

「蝦夷地の西半分の測量するという、第二回測量の申請を出しておいたほうがいいだろう」

忠敬「そういうことだったんですか」「やらせていただきます。企画を練り直して申請を致します。申請書は桑原先生の内見を頂いてから清書します。お時間をください」

桑原「いいだろう。よく考えるんだな」

忠敬は手ごたえを感じ、雄大な計画を立てた。蝦夷地は寝泊りすら大変な処だった。西半分の測るとなると、足元を固める必要を感じ、函館で船を購入し船に寝泊りして測量をおこなう。測量が終わったら船は売却するという案を立てた。そして現地で下図くらいまでの作業が出来るよう、事務用品運搬のため長持ち運搬の人手を希望する申請書を作り、桑原の内見に供した。

桑原はすぐ堀田撰津守邸に持参し、若年寄の内覧を受ける。さすがの撰津守もここまでは考えていなかった。費用の問題も含めて考慮し、船購入の件と長持ち人足の件は削除し、口頭で申し出ては、とアドバイスした。趣旨はすぐ、忠敬に伝えられ書き直しを勧められた。師匠の天文方・高橋至時にも報告され、協議が始まる。

忠敬は口頭のお願ひなどでは、無視される恐れを感じて抵抗する。万全の用意をせずに始めても無益な努力をするだけでいい成果は得られないと反論。申請内容が議論となった。

いまでもよくあることだが、実施部隊と指令中枢との意見の食い違いである。そんななかで、堀田撰津守は、退任はしたが幕閣に対して影響力を持っている前・将軍補佐役・松平定信（楽翁）を訪問する。

堀田「ご無沙汰しています。最近オランダ渡りの珍しい鳥類図鑑を入手しましたので、ご覧にいれようかと  
思い持参致しました」

定信「どれどれ。なかなか徹底して美しく出来ている」「あなたの博物図誌もこのような物を考えているんですか」

堀田「なかなか。思ってはいますが進みません」

定信、しばらく図鑑を眺める

堀田「ところで、楽翁様は地図には大きな関心をお持ちでしたが、最近天文方で、伊能なる測量師に命じてこのような蝦夷図を制作させました」「なかなか良い仕上がりと存じ、提出前の控え図ですが持参しました。ご覧になりますか」

定信「見せてもらおう」

堀田「ちと、広い場所が要ります」

定信「では別室だな」

広げた一枚の小図と二十一枚の大図の前で、定信と堀田

堀田「図中の朱線が測量したルートです。蝦夷地のニシベツまで約八百里を百八十日かけて歩いています。所々にある星印は天体観測をして、地上の測量の誤差を修正した場所です」「そして沿道の風景を絵画風に描いています」

定信「なかなかやるのう。見事だ」「これから先はどうする？」

堀田「そこですが、とりあえず、蝦夷地西部を考えてみては、と伝えてありますが、余程大変だったと見えて、簡単にはいきません。船を買いたいとか、長持ちの用意をといわれています」

定信「蝦夷地西部か——？。わしも谷文晁、村上島之丞を供にして、草鞋履きで伊豆を巡視したことがあるが、国防の要地は伊豆から相模、房総かと思う。本州東海岸を下北から伊豆あたりまで正確に測量するのが緊要ではないかな」

堀田「分かりました。本人は房総から蝦夷西部を測りたいと言っておりますが、蝦夷西部はあきらめさせて、伊豆から本州東岸ということに致しましょう」

定信「それがいい」

かくて幕府の方針が決まり、堀田撰津守から高橋至時に対し、第二次測量は伊豆から本州東海岸として、忠敬と協議し申請するよう内意が伝えられた。至時は忠敬と相談し、幕府首脳部の意図を伝える。忠敬も満足し納得した。

申請書を出したあと、与えられる人足数などをめぐって、幕府の事務当局とやりとりがあったが、幕府側のリードで計画が進められた。測量実施についての先触れは、勘定奉行・道中奉行連名で出され、幕府代官に各地への伝達を命じられた。長持ちの持ち人足を利用可能にするなど、幕府の援助が向上したが、支給される手当ては、1日銀十匁とわずかに増えただけだった。